

「集い」の アメニティー



表

紙と上の写真を数回見比べれば、「集い」のアメニティーを今昔物語として体感できます。「集い」は知の源泉であり、「知の質」は「集う場のアメニティー」にも依存します。このため欧米の大学の新キャンパスには、最初に素晴らしい雰囲気のレストランが建設されると聞いたことがあります。また、大学の発祥は、中世の西欧諸都市に結成された職業別組合、その中でも知の交流を目的としたギルドにあると伝えられています。したがって、現在でも、欧米の知識人は、このような伝統を大切に守っていると考えられます。

さて、上の写真(出典：農芸化学卒業アルバム「思い出」、1939年)から醸し出される雰囲気から察するに、これら学生「集いの場」としてのアメニティーは、もっぱら語らいの潤滑剤としてのアルコールが一役買っているようです。この写真が撮影された場所は不明ですが、研究室以外であれば、本郷通りや根津あたりの迷路に連なる古き木造家屋を改造した飲み屋で撮られた可能性が高いと思われます。私が弥生キャンパスに棲み着いた安田講堂騒乱直後の「集い」の場と雰囲気も、ほとんどこのような状況であり、時として殺気さえ放射する「集い」もありました。現在では、弥生キャンパスのアメニティーも向上し、アルコール抜きで穏やかな「集い」が観られるようになっていきます。

最近になって、農学部3号館中庭のアメニティーに革新的な向上がもたらされました。その結果、表紙のように、樹木と草花に囲まれたレンガ敷きの散策路やウッドデッキが和やかな集いを演出し、ちょっと内緒にしてほしいのですが、散策中に収穫の楽しさも味わえます。さらに、最も革新的な点は、場としてのアメニティー創造が「ミドレンジャーズ」と自称する事務職員有志のボランティア活動により成し遂げられ、さらには、これらの人々のハートにもアメニティーが創造されている事実です。ちなみに、中庭と心のアメニティーを社会科学観察者として賞賛している私は、長年に渡り農学主題科目「生活とアメニティーの科学」の世話人を務めさせて頂いています。

国際情報農学研究室
相良泰行 教授